

# シュレディンガーの女

田中彼方

「ただいま」

川島は独り言のように呟きながら玄関を開けた。

「おかえりなさい」

由紀子は玄関まで迎えに来て言った。

「あなた顔色悪いわよ。どうしたの？何かあった？」

「いや、なんでもないんだ。ちょっとね、事故った」

憔悴し切った表情で、喉の奥からひねりだすように潰れた声で川島は答える。

「ちょっとって…、なんでもなくないじゃない。事故って車で？大丈夫なの？」

「お前はこんな時でも車の心配か？」

「そんな事言ってないでしょ？いつ私が車の心配したって言うのよ」

「疲れてるんだ。そっとしといてくれよ」

酒の匂いに顔をしかめながら由紀子が言う。

「お酒飲んだでしょう、駄目じゃない車で…」

川島は靴を脱ぐと、まだ口を閉じない妻を押しよけるようにして部屋に入った。

ネクタイを緩めながら居間へと向かう。

そのまま倒れるようにソファへ腰を降ろし、スーツのポケットから煙草を取り出し火をつけた。

煙を深く吸い込むと、両手で顔を覆った。

由紀子は憔悴しきった夫の様子を、ただ心配そうに見つめていた。

翌朝、黙ったまま朝食を済ませると、目を合わせないまま由紀子が言った。

「ねえ、保険会社には連絡したの？事故の原因とか説明しないと」

川島は黙ったまま、煙草に火をつけた。

「私にはそうやって黙っててもいいけど、保険会社にはちゃんと話してよね。それ位できるでしょ？」

肺に入った煙を無理矢理吐き出しながら川島が言う。

「俺はしこたま酒を飲んでた。残念だが保険は下りない」

「どうするのよ？車はちゃんと動くの？これから会社へはどうやって行くの？修理するお金なんて家にはないわよ？このマンションだって買った時の半分以下の価値になってるのに、ローンはほとんど減ってないのよ」

「そんな事は君に言われなくても分かってる。君が心配してる車は無事だよ。バンパーが派手にひしゃげただけだ」

「私はなにも車の心配だけをしてる訳じゃない。私はあなたの事を…」

「俺の事より、金と車の心配だろうよ」

川島はそう言うと乱暴に煙草を消しながら立ち上がる。

「待ってよ、話はまだ」

由紀子の言葉を遮って背広を着ながら川島が言う。

「今日から電車で会社へ行く。もう出ないと間に合わないんだ。君でもそれ位分かるだろ？頼むから朝くらいは静かにしてくれ。仕事前に余計気分が落ち込む」

川島は部屋を出ると、地下の駐車場に車を見に行った。

酔っていたから、もしかしたら思ってるほど酷い状態じゃないかもしれないと、そう思った。

車の正面に回って、川島は顔をしかめた。

思ってるよりも酷かったからだ。

バンパーは歪んで地面にくっついているし、ウインカーは粉々、左のミラーもない。

「よくこれでここまで走ったな……」

思わず口にしながら、バンパーの端にこびりついているものに気付いてそれをハンカチで拭いた。

川島は立ち上がり、キーでトランクを開けて中身を見る。

去年の花見で使った青いビニールシートを取り出すと、車のフロントにかけた。

ベンツSL550。この車は由紀子の父親からのプレゼントだった。

いくらするかは知らないが、川島には手の出せない車なのは明白だった。

川島は義父の好意を何度も断った。

「金とか車とか、そんなもののために君と結婚するんじゃない」

由紀子に何度もそう言った。

交際を始めた時、義父の言葉の端々にそういうニュアンスを感じていたから意地になっていたのもあるだろう。

それでも義父は譲らず、

「君はいい大学の出だし、いい会社に勤めていて、将来も有望だ。はじめは信用していなかったが、父親とは皆そういうものだろう？それでも君を知るにつれ娘を任せてもいいと思うようになった。これを君たちへの最後のプレゼントにさせてくれ。それならいいだろう？」

最後にそう言われて川島も折れた。認められて気分も良かった。

「由紀子さんは僕が必ず幸せにします」

あまりに浮かれてテレビドラマのような台詞を本気で口にした。

順風満帆のはずだった。ところが、それまでの好景気が嘘みたいに消えた。

不況は終わりが見えず、部署の成果も上がらない。給料は毎年下がった。

入念に思い描いていた未来は絵に書いた餅だった事を思い知る。

ローンの返済で家計は逼迫。

猫の手も借りたいのに圧倒的な義父の財力を頼れない。＼

はじめてこのマンションを見せた時の義父の表情と、大見得を切った自分の言葉を思い出すと、

それだけではできなかった。何度も頭に浮かぶ言葉を自尊心だけで振り払った。義父の落胆する顔を見たくなかった。

金勘定に疎かった妻が、年を追うごとに細かくなって所帯じみてくるのも嫌だった。

自分が妻の品位を貶めているような気がしてやるせなかった。

それでも妻は、義父に言いつけるでもなく、忍耐してよくやってくれている。

妻の努力は十分分かっているはずなのに、頼みの人事で昇進が見送られた。たったそれだけの事で我を忘れた。

酒を飲んで事故を起こし、しまいには由紀子に当たってしまった。

自分が情けなくて仕方がなかった。

こんなはずじゃない。こんなはずじゃない。

川島は何度もそう呟いている事に気付いてやっと我に返った。

スーツの袖をめくって時計を見る。まだ十分余裕があった。

その時車の傍を男が通りかかった。

男は川島を無表情に見ると口を開いた。

「妻を探しているんですが、あなた見てませんか？」

感情を感じない平坦な口調だった。

「いや、見てません。すみません、急いでいるもので」

川島は矢継ぎ早にそう言って会釈をすると、歩き始めた。

男が誰かも知らない。誰だか知らない男の妻を川島が知るはずもなかった。

3 mも歩かないうちに、背後から男の音がする。

「いい車ですねえ。ところでこの青いシートはなんですか？」

川島は振り返って言った。

「ゆうべ、ちょっとぶつけちゃいましたね」

川島の答えに反応するでもなく、男は黙って青いシートを見つめていた。

「恥ずかしいから隠してあるんですよ」

歩きはじめながらそう言う。じろじろ見てくれるなよ、という意味だった。

男は無表情に川島を見返した。

気味の悪い男だ。

そう思いながら川島は駐車場の出口へと向かい、外に出る前にもう一度振り返った。

男はまだそこにいて、腰を屈めてシートをめくっていた。

「くそっ、なんなんだよ、あいつは」

川島が戻りかけたところで、男はゆっくりと立ち上がるとエレベーターの方に向かって歩き出した。

そのまま後ろ姿を見ていると、男はまた緩慢な動作で振り返り川島の目をみつめた。

目が合ったような気がした川島は薄ら寒いものを感じて顔を逸らし、また歩き出した。本当に気味が悪かった。

駅まで歩く途中で何度も看板を見かけた。

通り魔注意！女性の一人歩きが狙われています！

看板にはそう書かれていた。

駐車場で会った気味の悪い男の顔が川島の脳裏に浮かんだ。

このあたりは高級マンションが立ち並ぶ巨大なベッドタウンになる予定だった。

都心からそう遠くなく、駅までも30分とかからない。自然も充分残っていて静かでいい環境だ。

居住地から駅を結ぶバスも走る計画だったし、映画館やショッピングモールも建設されるはずだった。

しかし景気の落ち込みと共にそれら全ての計画が止まってしまった。川島と同じで杜撰な計画だったのだ。

建設途中のマンションはそのまま放置されている。電灯は完成したマンションの周囲にいくつかあるだけだ。

車通勤でこれまで考えた事はなかったが、夜道はかなり暗くなるだろう。

由紀子に気をつけろと言わないといけないな。

車の修理代。いくらになるだろうか。国産の新車が楽に一台買えるだろう。

廃車にするしか道はない。知り合いの業者に安くしてくれるように頼むか。

川島はぼんやりとした頭のまま、そんな事を考えながら歩いた。

ようやく仕事を終えて家路へと向かうサラリーマンの群れの中に川島はいた。

誰もが下を向いて背中を丸めて歩いている。

くたびれた背広と同じような表情を浮かべた人ごみの中、家路に帰る喜びを噛みしめる事のできる人間はどれくらいいるのだろうか。酔って事故を起こした二年前のあの日から全てうまくいかない。今日は抱えている企画の最後のプレゼンだったが、どうせ今回も駄目だろう。

川島が自宅マンションを見上げる頃にはすっかり夜のとぼりが下りていた。

有名デザイナーが設計したというマンションはいつもと同じように、眩い夜空の中にその姿をさらしている。

購入当時の誇らしい気持ちを思い出す事はもうない。ただ川島の気分を重くするだけだ。

「ただいま」

小さく呟きながら玄関を開ける。居間の電気とエアコンをつけると、まっすぐにベランダに向かった。

煙草をすい終わる頃には部屋もそこそこ暖まる。

地上20階から眺める景色は美しい。この美しい夜景を見ながら一服するのが川島にとって一番安らげる時間だった。

胸ポケットから煙草とライターを取り出す。「くそっ」思わず毒づく。ラクマイルドは空だった。どうする？今から降りてコンビニに行くのは億劫だった。諦めて風呂に入って寝るか。ついてない。「畜生！」声を荒げた。

「どうかなさいました？」

川島は驚いて声の主を探す。声はとなりのベランダから聞こえた気がした。目を凝らすと闇に浮かぶ小さな光が動くのが見えた。火のついた煙草の明かりだ。

「あ、お隣さんですか？」

川島が言うと、赤い光が輝きを増してぼんやりと人影を照らした。明かりが消えると同時にまた優しげな声がした。

「煙草ないんでしょ？私のを差し上げますよ」

「え、あ」

川島が戸惑っていると、ガサガサと音がした。隣人が煙草を取り出しているのだろう。少しだけ迷ったが素直に隣人の好意を受ける事にした。隣人も自分と同じ趣味を持つ仲間だと考えると親近感が湧いたのだろう。一服しないでベットに入るのも気が進まないし、もう一度地上に降りる気力もなかった。

「行きますよー？」

「すみません、お願いします」

一拍置いて、煙草が数本体に当たって落ちるのが分かった。

「すみません、ありがとう」

川島は礼を言いながら暗闇に落ちた煙草を手探りで探した。

「私、ピースだけどね、構わなかった？」

「あ、はい、何でもいいんです。吸えれば」

川島は地面に落ちた煙草を拾い集めると、一本を口にくわえ残りをラクの空箱にしまった。火をつけて十分な煙を肺にいれるとようやく落ち着くことができた。

「いつも吸ってる銘柄は何？」

「ラクです。ラクマイルド」

川島は隣人の問いに答えながら煙を吐き出す。ベランダに体をあずけ、手すりの向こうにだらしなく両手をぶら下げる。吸えないと諦めた時の煙草はやけにうまかった。肺の煙を全部吐き出すと、川島は言った。

「失礼ですがお名前を伺ってもよろしいですか？ 恥ずかしながら僕、お隣さんの名前も知らなくて」

「私も同じですよ。壁が厚いから物音も聞こえないしね、住んでいる人がいるのかいないのか、それすら分からなかった。そうだな、私の事はピースと呼んでよ。私もあなたの事をラクと呼ぶことにしよう」

「はは、それ面白いですね。分かりました。明日も同じ時間にまた来るのでその時に煙草お返ししますよ」

「いやいや、どうか気をつかわずに。私にとってここでの一服は大切な時間だし、仲間ができたようで嬉しいよ。ベランダの同士だな。じゃあ、ラクさん。私はこれで失礼しますよ」

「あ、はい。どうもありがとうございました。おかげさまで生き延びました」

「ははは、それは大袈裟だな」

隣人の声が戸を閉める音と同時に消え、再び静寂が訪れる。

川島は短くなった煙草をもう一度だけ吸い込んでから部屋に戻った。

仕事で張り詰めていた後に残るだるさも消え、久しぶりにすっきりとした気分だった。

翌日、川島は仕事を早めに切り上げると、駅の構内のコンビニでピースとラクを一箱ずつと、暖かいブラックの缶コーヒーを2本買った。駅から自宅までの道のりは相変わらず暗いが、長い事続いた通り魔の被害も、耳にしなくなっていた。

コンビニの袋をぶら下げて自宅の玄関を開ける。袋が音をたてないように気を遣い、いつものように「ただいま」と小さく呟く。スリッパを履くと同時に由紀子が洗面所から出てきた。川島は顔をしかめる。

「珍しいわね、それお土産？」

「え？ ああこれ？ 煙草とコーヒーだよ。あいにく君の分はない。帰ってるとは思わなかったから。小遣いの余裕もないしね」

川島が言うと、由紀子が興味を無くした冷めた口調で言った。

「居間にご飯あるからチンして食べて」

「ああ。分かった」

川島が靴をそろえて顔を上げると、由紀子はもう洗面所へ戻っていた。

由紀子は仕事を始めてから、箱入り娘らしい世間ずれした印象がなくなった。大した収入はないだろうが、自分の欲しいものは自分で買うのが楽しいようで、前よりも活発になった。今では夫婦間のバランスもどちらかという由紀子の方に傾いていた。それは川島の方にどこか後ろめたいような感情があるせいだろう。

川島は居間に入ると、テーブルにちらりと目をやる。ラップがかけられた冷めた料理が見える。由紀子は遅くなくても家事をきちんとなした。それが知らず知らず罪悪感と重圧になっていた。そのまま料理を通り過ぎるとエアコンはつけずにベランダへ向かう。

戸を開けてベランダに出ると、右手に目をやり隣人の気配を探る。暗くて分からない。煙草の明かりも見えない。

「ピースさん、いらっしゃいますかー？」

川島が囁くように言った。

「お、ラクさんおかえりなさい。今日は早いですね」

隣人の返答に川島は安堵する。

「コーヒーを買ってきました。あと煙草をお返しします」

「おお、それはわざわざどうも」

「えっと、どうしましょう？袋ごと投げてもいいですか？」

「じゃあどうしようかな。私の煙草の明かりを目安に投げて下さい」

川島は小さく頷くと、自分の分の煙草とコーヒーだけ取り出して、振り子の要領で狙いを定めると手を離れた。

コンビニ袋が風の抵抗を受けてバサバサと放物線を描く。袋を掴む音が聞こえ、中身を探る音と同時に隣人は言った。

「や、気を遣わないでと言ったのに。でも今日はありがたく頂戴しますよ」

「いえいえ、ピースさんは命の恩人ですから」

「ははは、ラクさんは大袈裟だ」

忍び笑いをもらしながら隣人が言い、二人が缶コーヒーのプルタブを開ける音が重なった。

川島は煙草に火を点け、煙を吸い込みながら言う。

「...ピースさんは自分が何のために生きているか考えたことありますか？僕は最近良く考えてしまおうですよ。暗いですよね」

「ははは、いきなり深いですね。ラクさんはお子さんいらっしゃる？」

「いえ、まだです」

「ラクさん。女性に好意を抱くのは何のためだと思います？」

「それに意味があるとすれば、子孫を残すため？」

「そうです。種を植えるため。恋だの愛だのは、ただの脳の電気信号に過ぎない。所詮人間はただの動物で本能に従って生きている。だから生物学的に言うなら、生きる意味とは子孫を残すため。それだけです」

「えっとつまり、子供が生まれれば幸せになれると？」

「いえ、そこがゴールだ。生きる意味を達成したのにまだ、生を渴望する。その後の生に意味を見出したがる。人間の具合の悪いところだ」

「じゃあほとんどの人間は生きてる意味が無いって事になりますよ？」

「そう。人間には2種類しかない。生きてるか死んでるか、それだけだ。人生に意味を見出す事に意味はないんだから、悩んだって仕方がない。皆、死にたくないから仕方なく生きているんだ。ところでお宅何年ローン？」

「25年です」

「私もそんなものだ。無理に生きる意味を考えるとすれば、私の人生の目的はローンを払うためになってしまうよ」

川島は困惑しながらも口を開く。

「はあ、なるほど真理ですね。僕もそうだ」

「はは、ラクさんは真面目だ。本気に受け取らないでよ？」

「ローンを払い終わって役目を終えて死ぬ、か。人間って嫌ですねえ」

川島が溜息混じりに言うと、しばらく煙草の煙を吐く音と、コーヒーを啜る音だけが聞こえた。

「カマキリはね」

沈黙を破り唐突に隣人の声がある。

「え？カマキリですか？」

「そう。カマキリはね、交尾が終わるとメスがオスを喰らうんだ。子育てのための栄養補給にね」

「うわあ、カマキリに生まれなくて良かった」

「うん。そう考えると人間も悪くないでしょう？それじゃあ私はこの辺で」

「あ、はい。おやすみなさい」

「変な話をしてすまない。私はただラクさんを元気づけようとしたんだが、話が脱線した。悪い癖なんですよ」

「いやいや、そんな。面白かったですよ」

隣人が戸を開けながら言う。

「ラクさんも気をつけて下さいね」

「え？何に？」

「メスに喰われないように」

戸を閉める音と同時に再び静寂が訪れた。あれで元気づけようとしたつもりなのか？と川島は苦笑する。短くなった煙草を一口だけ吸って部屋に戻った。

その夜、遅い夕食を終えシャワーを浴びてからベッドに入ると、久しぶりに由紀子に誘われた。形だけの行為を機械的に済ませると、川島は由紀子に喰われる自分を想像をして身震いした。

次の日、川島が仕事を終えたのはいつもより少し遅めの時間だった。満員電車で揺られながら川島は考えていた。

ピースさんは今日もベランダに現れてくれるだろうか。

川島はベランダ越しの隣人との少し変わったコミュニケーションを楽しみにしていた。顔も見えない名前も知らない人間との会話は体裁を気にしなくて良かったし、つまらない人生を見栄でごまかすような事もしなくて良かった。素直に自分の本音を吐き出せる相手がいることで気持ちが楽になる事にはじめて気付いた。隣人は少し変わった人物ではあるのだろうが、自分の事を思って、話を聞かせてくれたのは確かだ。悪い人間だとは思わなかったし、逆に不器用な人なのだろうと好感を抱いていた。

ふと車内に目をやると、中吊り広告は芸能人の離婚の見出し一色だった。社内での話題にも何度も出てきた。他人の不幸に喜びを見出すのは、自分が不幸だからなのだろう。やはりみな同じなのだ。人間は生きているか死んでいるかの2種類しかいない。川島は隣人のその言葉を思い出していた。

自宅に帰る。妻の姿は見当たらなかった。川島はエアコンをつけるとそのままベランダに向かった。隣人はいないようで、呼びかけても反応が無かった。落胆して煙草に火を点けた。一本吸い終わり、二本目に火を点けようとした時、隣の窓が音をたてて開いた。

「ラークサーン、いますかー？」

川島は火を点ける動作を中断して慌てて答えた。

「あ、はい、いますよ。こんばんは、ピースさん」

「こんばんは、ラークさん。いやあ、良かった。今日はなかなか来ないから、会えないかと思いましたよ」

隣人もこの時間を楽しみにしてくれていたかと思い、川島の頬が緩む。

「早速だけど、ラークさんはさ、小遣いとかもらってる？」

「ええ、一日の小遣いは100円玉で事足りてしまいますけど」

「そっか、どこもそんなもんなんだな」

そう隣人が答えるとライター之音と共に小さな光が灯った。

「ええ、不況はいつまで続くんですかね？煙草の値上げが死活問題ですよ」  
苦笑いしながら川島が言う。

「あそこ」

「え？」

「あの外灯の向こうにさ、完成間近で工事が中止しているビルがあったでしょう？」

「ああ、一番大きいビルですね」

「あのビルの工事がまた始まったら不況脱出の合図ですよ」

「ははあ、なるほど。もうずっとあのままだもんなあ。また工事がはじまるなんて想像できませんよ」

「ここ数年は本当に苦しかったですよ。見入りはあるんだけど、ろくな仕事ができなくてね」

「ピースさんはどういった仕事をしているんです？」

「脚本を書いているんですよ。妻が出て行ってから気持ちが塞いでしまってね。自分でも驚くほど書けなくなった」

「そうだったんですか」

「ラークさんとはどう？上手くいってるの？」

「いやあ、僕の稼ぎが少ないもんだから、妻も働きはじめて、肩身が狭いんですよ」

「どうして？今はそんなの普通じゃない」

「妻は絵に描いたような箱入り娘だったし、向こうの親にもあまりいい顔をされなかったから、心配するな。お前に苦勞はさせない。必ず幸せにする。なんて言ってしまったんですよ」

「ああ、なるほどね。それはあまり具合がよくないね」

「はは、でしょう」

自嘲気味に川島が答えた。

「私もね、一緒にいる時は、どうでもいいようなくならない事で癩癩を起こしたりしたんだ。今思うとね。それが急にいなくなるもんだから、火が消えたように静かになってね。寂しくなんかないと何度も自分に言い聞かせたものだ。これは動物的な本能が起こす、ただの電気信号だってね」

「ははあ、それでこないだあんな話を」

「うん。だけど私は妻以外の女にちっとも興味を抱けなくてね。それだと動物的な本能とは矛盾するじゃない？自分の気持ちに説明がつかなくて、無性にイライラするんだ。だからラークさんもね、気をつけた方がいい。一緒にいると中々そこに気付かないからね。罪悪感なんて捨てた方がいい」

川島が黙っていると、隣人が続けて言った。

「まあ、中々難しいとは思うけどね、ラークさんの奥さんは君の前から姿を消したりしていないんだ。君の事をちゃんと考えていると思うよ」

「そうですね。そう思うと気が楽ですね。でも最近うるさいんですよ。靴はきちんと揃えなさい。エアコンは無闇につけない。煙草は部屋で吸わない。箱入り娘だった頃の面影は、もはやない」

「ははは、分かる。ラークさんはね、尻に敷かれるタイプだよ」

「え？そうですかね？」

「そうだよ。分かるよ」

それから、隣人は住宅ローンの金利を下げるテクニックを川島に教え、その後は老後と年金の話

をした。そんな他愛もない話をするのが、川島と隣人の日課になった。川島の仕事に合わせて明日の時間を決め30分ほどの会話を楽しんでから、おやすみの挨拶を交わす。煙草の煙と共に鬱積した思いを吐き出せているようで、川島の心の重荷も少しずつ軽くなっていくようだった。

川島と隣人がそんな日常を過ごしている間に、自宅マンションに灯る明かりもすこしずつ増え始めた。幸せそうな新婚夫婦も目にするようになった。優しく微笑む彼等には下火になった芸能人のゴシップなど興味がないだろう。川島も妻に感じる罪悪感という重荷をすこしずつだが軽くしていき、そのせいか仕事にも身が入るようになってきた。進めていた企画にもようやくゴーサインがかかり、ここに来てようやく、全ての歯車がかみ合ってきたかのように川島は感じていた。全てが隣人のおかげだとは思わないが、隣人に愚痴を聞いてもらい、その言葉に何度も笑わせられたり、時には驚かされたりして元気づけられた。川島は顔も知らない隣人をはじめでできた本当の意味での友人だと感じていたし、心の底から感謝していた。

そんなある日、川島がいつものように自宅に帰る途中にいいものを見た。そのおかげで足取りも軽くなった。

早くピースさんに教えないと。そう考えると自然と早足になる。

「ただいまー」

「おかえりなさい。早いわね」

珍しく由紀子が玄関まで来た。

「どうした？何かあった？」

川島が靴を脱ぎながら聞くと、由紀子は言った。

「あなた、通り魔ですって。しばらくなかったのにね」

「え？またなのか。そうか、新婚さんも何組か入ったのに物騒だな」

「あなたも気をつけてよね」

「おいおい、狙われるのは女性だろ？」

由紀子が頷くのを見て川島が続ける。

「じゃあ気をつけないといけないのは君だろう？駅までの道だけでも電灯をつけてもらえるよう  
にかけあってみるか」

「え？でも、そんな余裕あるのかしら？」

「向かいのビルの工事が再開した」

「それが何なの？」

「不況脱出の合図だよ」

「え？そうなの？」

「そうだ、俺がかけあってみるから、それまではなるべく早く帰ってきた方がいい」

「うん、分かった」

川島は綺麗に靴をそろえると、真っ直ぐベランダに向かった。

由紀子はそれを黙って見送ると台所に入った。

窓を開けベランダに出ながら川島は口を開く。

「ピースさんこんばんは。今日はいいニュースと悪いニュースがあります」  
隣人には外出の気配がないので近所のニュースを伝えるのは川島の役目だった。

「悪いニュースから聞こう」

煙を吐く音と同時に、隣人の返答。煙草に火を点けながら川島が言う。

「通り魔がまた出たって」

「また？前にもあったのか？」

「そうですよ。知らなかったんですか？」

「知らないねえ。それで、いいニュースは？」

「向かいのビルの建設が再開したみたい。建設会社の張り紙が新しく張り替えられてましたよ」

「いいね、不況脱出ののろしだ。そうだ、通り魔っていえばね」

唐突に話が入れ替わる隣人の癖に川島はもう慣れた。

「はいはい、なんです？」

「うん。通り魔の犯行には2種類しかないんだ。計画的か、又は突発的か、そのどちらかしかない。ここで起こるその通り魔はどちらだと思う？」

「以前ニュースになった時は、計画的な犯行って言ってましたね。確か」

「その根拠は？」

「一連の犯行はいずれも都心から半径30キロ圏内で、時間と犯行の間隔もずれがないって言ってたような」

「ラークは奥さんを殺してしまいたいって思ったことある？」

「いや、そりゃ以前はいなくなってくれたら気が楽なのに、なんて思った事もありますけど。でもせいぜいその程度ですよ」

「その一連の通り魔は同一犯なんだろうか？」

「そうなんじゃないですか？テレビでもそう言ってたし」

「例えば、恋人とか奥さんを殺してしまいたい人間がいるとする。実際たくさんいるだろうが、これは過程の話だ。いいか？そのニュースを見た殺意を持った人間が、前の犯行と同じ間隔を開けて、夜道で恋人とか奥さんを殺す。それをまた他の誰かが繰り返すんだ。それなら犯人がつかまったとしても一人だけだ」

「それはおかしいですよ。それじゃあ同じ夜に何人も誰かの恋人とか奥さんが死んでしまう。それに、この事件にはまだ死人は出ていない」

「ふむ、そうか。じゃあさ、無差別殺傷事件ってあるだろう？ある人物への明確な殺意があるのに、それを隠すためにわざわざ大量の殺人を犯す訳だ。動機が分からなければ、犯行は露見しにくい。木を隠さば森へってね」

「それもおかしいな。動機を隠すのを理由に、わざわざそんな危険を冒すんですか。動機も何も、あつという間に掴まりますよ」

「ふむ、そうか。確かにそうだね」

「何です？新しい脚本のアイデア？」

「そうだ。連続ドラマの脚本の打診があってね。人がたくさん死ねば何でもいいらしいんだ」

「TVドラマの脚本ってそうやって何となく決まるんですか？」

「そうだ。それさえクリアすれば、脚本の良し悪しはあまり関係がない。くだらない仕事だよ。誰にでも出来る簡単なお仕事です。って求人がよくでてるだろう？あれは大抵が脚本の仕事だ」

「誰にでもできたら、わざわざピースさんに話は来ませんよ」

「妻が帰ってきたんだ」

「え？それも新しい脚本ですか？」

「ラークにはまだ言ってなかったかな？」

「全然聞いてません。本当に？いつ帰ってきたんです？」

「君と、こうしてここで話をするようになって間もなくだね」

川島は驚いて、しばらく言葉が出てこなかった。何とか言葉を探して口を開く。

「...それじゃあ、もう随分たってるじゃないですか。どうしてそういう大事な事を言わないかな」

「すまない。言ったような気がしたんだがね」

「それで、どうなんです？新しいアイデアがたくさん湧くようになった？」

「たくさんではないが、これだっていうのを進めているところだ。今話したクソみたいなアイデアとは別にね」

「それで奥さんとはどうなんです？以前より優しくできてるんでしょう？」

「まあ、照れくさいから私は何にも言わないね」

「それじゃあ前と同じじゃないですか」

「決定的に以前とは違う。癩癩を起こさなくなった」

「いいですか？またいなくなる前に、優しい言葉のひとつでもかけとかないと、また後悔しますよ？」

「...忠告ありがとう。努力はしてみよう」

ちょうどその時、「あなたご飯できたわよ」と、由紀子の声が部屋から聞こえ、川島は言った。

「じゃあ、ピースさん。今日はこの辺で。明日もまた同じ時間になると思います」

「ああ、分かった。それじゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

川島が部屋に戻ろうとすると、「ああ、そうだ」と、隣人の声がした。

「ラークに明日、面白いものをあげるよ」

隣人はそう言うとそそくさと部屋へと入っていった。

川島は一瞬だけ、面白いものとは何なのか考えたが、すぐにやめて部屋に入った。どうせ考えても分からないからだ。

翌朝、川島は入社する前に、マンションの管理人室に寄る事にした。管理人と言っても、彼は他の住民と変わらず、このマンションに住んでいる。ただ気紛れに管理人室に顔を出すのが老人の唯一とっていい仕事だった。彼がマンションのオーナーなのか、その親族なのか川島には分か

らない。どちらにせよ楽な身分に変わりはない。住民の安全のために外灯を増やしてほしいという意見を管理会社に伝えるくらいはしてくれるだろう。川島はそう考えて、管理人室を覗くと老人は眠たそうな目をしたまま、その意見を聞いて、当然の意見だ。という具合に、うんうんと頷いた。これで一応、目的は果たした。外灯の設置がこれ以上放置されるようなら管理会社に直接問い合わせてみるのもいいだろう。

駅までの道のりの途中に、新しく変わった建設会社の張り紙を見て、川島の気分はまた軽くなる。これが本当に景気回復の兆しなら、進行中のプロジェクトも軌道に乗るはずだ。同期には先を越されたが、昇進だって夢じゃない。そうすれば少しだけだが生活も楽になるだろうし、休日には由紀子の行きたいところへ連れて行ってもいい。そこまで考えて川島は頭を振った。いけないいけない。しっかり地に足をつけておかないと、と甘い幻想を振り払った。

この日も、川島は予定より随分と早く仕事を切り上げると、足早に帰宅した。もう以前のように気分が重くなることはなくなっていた。まだ暗くなる前に自宅に着いた。玄関を開けると、キッチンから由紀子の機嫌の良さそうな鼻歌が聞こえた。

「ただいま」

「おかえり。随分早いわね」

「ああ、最近何だか順調でね。少し怖いくらいだよ」

川島はそう言いながら時計を見た。隣人との約束までは充分時間があつた。

キッチンに顔を出し、川島は由紀子に声をかける。

「どうしたの？何だか機嫌がいいみたいだけど」

「え？そう？そんな事ないわよ。普通よ普通。お風呂沸いてるから入っちゃえば？」

「ああ、そうだな。そうするよ」

川島は風呂から戻ると、時計を確かめた。そろそろ約束の時間だった。

「ちょっと、一服してくるよ」

由紀子に声を掛けると、早速ベランダに向かう。

「あ、あなた。ちょっと待って」

「なに？」

「言い忘れてたけど、隣にまた新婚さんが越してきて、挨拶に来たのよ。それで、それもらったの」

由紀子は居間のテーブルに置いてある包みを指差して言った。

「ふーん」

「越してきたのは、右か左の部屋か聞かないの？」

「何で？左だろう？」

「いいえ、右よ」

「右の部屋はピースさんとかだろう。何言ってるんだ。変なやつだな」

そう言ってベランダに出ると、もう外は暗くなっていた。

「ピースさん、ただいま」

煙草に火を点けながら、隣人に声を掛ける。

「あれ？ピースさん。いないんですか？」

しばらく待っても返事がないので、窓から顔だけ出して居間の時計を見る。約束の時間ちょうどだった。

「珍しいな」

隣人が約束の時間に現れないのはめったにない事だった。

その時、隣のベランダから、含み笑いがもれた。抑えきれないといった調子の笑い声だった。

「やあ、こんばんは」

「隠れてたんですか？何やってるんですか？」

「あれ？私がいてびっくりしないの？」

「びっくりって約束の時間でしょう。いない方がびっくりしますよ」

「あれ？奥さんから聞いてない？右隣に新婚さんが越してきたって」

「さっき聞きましたけど、左隣の間違いでしょう？」

「つまらないな。君は想像力が欠如している」

「何の事だかさっぱりですよ」

「普通、私がいる部屋に誰かが越してきたと聞けばもっと違う事を想像するだろう？」

「例えば？」

「最悪、私が引っ越した。もっといい想像は、私は最初から存在しない」

川島はしばらくその言葉の意味を考えた。

「右隣に新しい入居者が入ったら、ピースさんがいなくなった。若しくは存在しない可能性を想像しろと？」

「そうそう。それが想像力だろう。右隣は、左隣の間違いっていうのは最も貧相な答えだね」

「つまり良い想像力は、もしかしたら、あなたが僕の想像力の産物かもしれないと思う事ですか？」

「そうだ。それか、私は君の別の人格なんだ」

「飛躍しすぎてついていけませんよ。そのためにわざわざ妻と打ち合わせを？」

「そうだ」

「家から出るのか好きじゃないのに？」

「うん」

「妻は私がベランダに出ようとする、越してきたのは右か左か聞かないの？と言いました。わざとらしいし、変な言い回しだと思いませんか？」

「君の奥さんはそう言ったのか。そいつは具合が悪いね」

「私の妻に罪はありません」

「まあ、どちらにせよ、非常につまらない結果だよ」

「もしかして、昨日言ったプレゼントってこれの事ですか？」

「いや、違う。君はシュレーディンガーの猫を知っているかい？」

「シュレーディンガーの猫？何ですそれは」

「量子論の仮説だよ。正確には量子論に異を唱えるために出された不確かな例だ」

「はあ」

「量子は観測しようとする、その姿を変えるんだよ。観測した途端形を変える。これが量子のふるまいだ」

「ふるまい。ですか？」

「そうだ。可笑しいだろう？そこでこの実験だ。ある箱に猫を入れる。箱の中にはスイッチがあり、箱を閉めると毒ガスが注入される」

「猫が死にますね」

「黙って聞いてくれ。毒ガスが出る確率は二分の一だ。箱の外から猫の状態は見えないし、音も聞こえない。つまり猫の生死を確認するには、箱を開けるしかない訳だね。さあ、箱の中身はどういう状態か分かるかな？」

川島は答えを考えたが、隣人の言わんとする事が良く分からなかった。

「やはり君は想像力が欠如しているようだ。箱の中の猫は、生きているし同時に死んでいる。どちらの状態も重なり合って存在しているんだ。これが量子論だ」

「なんだか哲学的ですね」

「昨日言ったラクへのプレゼントはこれだ。これにヒントを得て私が暖めていた脚本なんだ」

「はあ、それじゃあ聞かせてください」

「そうだな題名は、シュレーディンガーの女だ。箱はこの世界でもいいし、このマンションでもいい。マンションの私の部屋でもいいね。そろそろ分かるかな？猫の代わりは私の妻だ」

「ピースさんの奥さんが猫の代わり？」

「そう、つまり私の妻は生きているし、同時に死んでいるんだ。状態が重なり合っている。まさに、この状況にぴったりだろう？妻が生きている状態ならば、私は平穏で幸せだ。ところが死んでいる状態ならば、私に平穏は訪れない」

「でも現実に奥さんは帰ってきたでしょう」

「もしそれが本当なら喜ばしい事だ。ところが私はそれを確かめる事ができない。確かめれば妻の状態は確定される。生きているか死んでいるか、それが確定してしまうんだ。とても恐ろしいだろう。だから私は確かめる事ができない。私が死ぬまで永遠にだ。どうだ可笑しいだろう」

「ちょっと良く分からないな。それに、生死が重なりあってたら脚本にならない。見る人は生か死か、その答えを求める」

「ラクにはこのアイデアの素晴らしさが分からないのか？まあいい、また明日詳しく説明しよう。それじゃ、おやすみ」

そう言うと隣人は静かに部屋に戻っていった。

川島は自分が吸っていた煙草がフィルターまで燃え尽きていた事に気付いて、もう一本取り出して火を点けた。

一本吸い終わっても隣人の部屋の明かりが点く事はなかった。

翌日、会社が終わる直前に人事の男から内線電話があった。彼は、川島の同期で人事の情報を酒のおごりと交換条件で話してくれる男だった。話は、川島が人事の昇進リストに再び名を連ねたという内密の報告だった。

それを聞いても、川島は手放しに喜ぶ事ができなかった。昨夜の隣人の話が頭から離れずにいたせいかもしれない。

「どうした？嬉しくないのか？」

電話の向こうで男は訝しげに川島へ聞いてくる。

男は川島が二年前に潰れるほど飲んで、その鬱憤と醜態を晒した相手だったから、彼がそう思ったのも不思議ではない。男に礼を言って川島は会社を出た。

川島が駅から自宅マンションへの道を歩き始める頃には、空はもう薄暗くなり始めていた。街路樹の道の傍には、外灯の設置準備が行われているところだった。これで由紀子も、新婚の夫婦も安心してこの道を通れるだろう。勿論、川島自身もだった。向かいの工事中のビルの敷地にも、大型のトラックやクレーン車が出入りをはじめていた。この辺りもようやく動き出したのだろう。

川島は自室のドアを開けると由紀子に「ただいま」と言った。由紀子の話によると、昨日、川島が帰宅するすこし前に隣人が仏頂面で訪れて、「右隣の部屋に入居者が越してくる」そう夫に伝えて欲しいといったらしい。由紀子はその訳を聞いたがどうにも要領を得ず理解できなかったが、夫と仲の良い隣人の頼みを断れず、実行したようだった。

川島は隣人の事が良く分からなくなっていた。いつもなら真っ直ぐとベランヘダと向かう道も、今日は少しだけ気分が重いような、そんな気さえた。

「ピースさん、ただいま」

「おかえり」

「さて、早速昨日の話の続きをしましょうか」

川島がそう言うと、隣人は原稿の束のひとつを川島のベランダに向かって投げて言った。

「それは、妻が生きている状態の原稿だ」

川島は黙って頷き原稿をめくると、煙草に火を点けた。

「私は完成前の原稿を人に見せたことがない。プロデューサーにだって見せないよ。話のあらましを伝える事はあってもね。それを君に見せるのは君が私の友人だからだ」

「僕は本当にあなたの友人なんだろうか。僕はあなたの事がよく分からない。あなたの本当の名前も知らないし、顔だって知らないのに」

「顔も名前も知らない方がいい事もあるって最初に言っただろう？」

「すこし黙ってて」

川島はそう言うと、乱雑に書かれた手書きの原稿を読みはじめた。内容は隣人が妻が帰って来た

事を告げてからの話とほとんど一緒だった。不器用で口下手の夫の元に、やがて蒸発したはずの寡黙で生真面目な妻が帰ってくる。夫はそんな妻を叱りつける事もしないし、抱き寄せる事もしない。ただ黙って妻を迎える。二人が以前よりも親密になった訳でもない。それどころか、どこか他所他所しい空気さえ漂っている。話としては、とりたてて面白くも無く、驚きのない平凡な内容だった。プロデューサーに受けがいいとはお世辞にも思えなかった。川島が原稿を閉じると、隣人が言った。

「どうだった？面白くもないし、平凡だろう？」

「間違いなくプロデューサーには受けないでしょうね」

「そうなんだ、だがそれはそれでいい」

「もうひとつの方は？」

川島がそう言うと、隣人はもうひとつの原稿の束を川島に投げた。

その時、川島は思い出していた。あの日の夜の事を。あの時の事は何度も何度も夢にも見た。浴びるように酒を呑み、その酔いも覚めないままに、ハンドルを握り、アクセルをふかした。自宅へと帰る道すがら、ヘッドライトが照らす道を何かが横切った。ハンドルを切ったのは、凄まじい衝撃と同時で、何もかもが遅いと川島は冷静に感じていた。車は安定を失い、横滑りしながら、ガードレールを突き破る。そうしてやがて電柱にバンパーをのめりこませながら、車はやっと停止した。エンジンから白い煙がたちこめている。

川島は車を降りると、赤いワンピースを着た女の下へと、ふらふらと歩いた。四肢を無残に折り曲げたその姿は人形のように見えた。ワンピースの元の色はもう分からない。鮮やかな赤は鮮血に染められた色だった。女の右手を掴み、それを引きずるようにして車まで運んだ。壊れた人形を運んでいるみたいで、不思議と重さは感じなかった。

トランクにそれを押し込めると川島はエンジンをかけなおし、ギアをバックに入れると、車をすこし動かして止めた。

無残に散らばった車と女の部品を拾い集めて、トランクに投げ入れていく。

道に零れた大量の血はタオルで綺麗にふきとった。

川島は冷静だった。車を自宅近くまでしばらく走らせると、電柱にもう一度追突させた。

女の血のついていない車の部品が選別してあり、川島はそれを電柱の傍に捨てた。

自宅に戻ると川島は驚くほど豪胆な一面を見せる。駐車場に普段どおりに車を止めると、妻に事故の説明をして、ベッドで泥のように眠ったのだ。そして翌朝、出勤の準備を済ませた川島は車の様子を見に駐車場まで下りた。昨晚の出来事はまるで悪い夢だったと確信しているように堂々と。

駐車場の入り口からその姿を見ている男がいた。その男、上杉は観察するような目で川島を見て

いた。

やがて川島は車のフロントに回りしゃがみこむと、青いシートを被せると、タオルでバンパーについた何かをぬぐったのだ。

上杉は思う。あの男が妻を殺したのだ。

男の近くまで歩く、男はまるで許しを請うかのように何度も何かを呟いていた。

「いい車ですねえ。ところでこの青いシートはなんですか？」

男は何か答えたようだが上杉にはなにも聞こえてこなかった。

男がこの場を離れるのをじっと待っていた。

やがて男が離れていくと、車のフロントに顔を近づけて観察した。鼻を近づけて匂いを嗅いだ。

バンパーに残るのは、康子の血の匂い。

上杉は確信した。

トランクを開ける道具をとるためにエレベーターに向かった。

駐車場の入り口には、康子を殺したあの男がいた。上杉を見つめていた。

川島は原稿を閉じると、言った。

「これは、もしかして、あの時の？」

「うん」

「すごい想像力だ。だが被害妄想も甚だしい。ピースさん。あなたは僕が本当に奥さんを殺したと思っているのか？」

「そう。私は復讐の時をじっと待っていた」

「期が熟すまで？」

「そう。いい想像力だ。君がかけがえのない何かを得るまで」

「そうして、あなたは僕のかげがえのないものを奪うわけだ」

「うん。君がこの世に絶望するようにね」

「でもピースさん。この話はおかしい。ほらここ。路上に流れた血をタオルで綺麗にふき取った」

「おかしいかな？」

「もう一度車を電柱に激突させるのはどんな意味があるのだろう」

「プロデューサーはそんな事気にしないよ」

「警察が来たときのために、もうひとつの事故現場を用意したのかな？」

「そう思う人もいるかもしれない」

「悪いけどピースさん。この話は破綻しているし、ひどく幼稚だ」

「世の中には色々な感想を抱く人がいるよ」

「それに僕があの夜避けたのは人間じゃない。猫だ。白い猫」

「そうか。それでその猫は死んだのか？」

「探したけど見つからなかった。生きてもいるし、同時に死んでいるんだ」

「シュレーディンガーの猫だ」

「そういえば妻が修理に出した車のトランクがこじ開けられていた。開けたのはピースさんだね？」

「うん。トランクにはミラーがひとつと、ウインカーの破片がいくつも入っていた」

「僕が拾い集めて入れたんだ。酒が入ってる内に事故が露見すると逮捕だから」

「私にはどちらのストーリーも必要だったんだ」

「なぜ？奥さんが生きているストーリーだけでいいじゃないか」

「妻はまだ私を愛していて、やむ無くその命を失うストーリーと、妻が私への愛を失い、私の前からその姿を消すストーリー。そのどちらも耐えられないほど辛かったんだ。どちらかを選ぶ事はできない。だからふたつのストーリーを考えた。妻は死んでいるし、同時に生きている。重なりあっているんだ」

「僕への復讐は実行する？」

「うん、ある意味では。しかし現実では実行しないね。川島は僕の大事な友人だから」

「僕はね、ピースさんの奥さんが帰ってきたと聞いてとても嬉しかった。でも、あの話が作り話だと聞いてとても悲しかったんです。そんな嘘を言うあなたを僕は本当の友人とは思えなくなりました」

「嘘と想像は違うだろう。君は想像力が欠如している」

「ピースさんの名前は本当に上杉さん？」

「それはどうだろうね」

「今日は疲れました。僕はもう寝ます。おやすみなさい」

「おやすみ」